安倍外交の試練

川上高司

◆3◆

日ロ接近に水を差す米

安倍外交の次なる試練は、5月上旬に予定される日ロ首脳会談と、5月26、27日の伊勢志摩サミット（主要国首脳会議）である。特に、今年は10月19日に日ソ国交回復60周年を迎える。だが、戦後70年たっても、日ロ間では平和条約が締結されていない。

これを見据えて、ロシアのラブロフ外相が来日し、北方四島の帰属問題を含む平和条約締結交渉について、岸田文雄外相と15日に会談した。

その流れに水を差すのが米国である。なぜ、そうなるのか―。

筆者は先日、ワシントンを訪問し、国防総省の幹部らにインタビューした。全員が口をそろえて言うのが「ロシアの脅威」だった。

昨年夏の米上院軍事委員会では、統合参謀本部議長、海兵隊司令官、海軍作戦部長がそろって、「ロシアが唯一、米国に対抗できる核戦力を保有する」「近年、欧州方面でのロシアの行動は信用できない」と説明した。

米ロの軍事的緊張は、2014年のウクライナ南部クリミア侵攻以降、高まっている。

米軍は欧州への重層配備を計画している。特に、東欧とバルト3国に米軍を常駐させる方針である。その一環として、米軍はウクライナ政権軍への訓練を行っている（3月30日、ウォールストリート・ジャーナル）。

当然、これに対するロシア軍の反発は強い。今月11、12日、バルト海の公海上に展開していた米海軍のミサイル駆逐艦「ドナルド・クック」に、ロシア軍のスホイ（SU）24戦闘爆撃機2機が異常接近するなど、一触即発の危機が高まった。

このような状況下では、米国は、日本のロシア対話を歓迎しない。だが、日本にとってロシアとの関係は重要である。

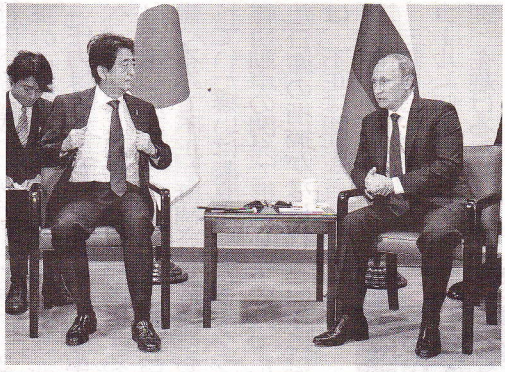
まず、①ロシアを引き付けられれば、中国や北朝鮮へのバランサー役を期待できる②ロシアはエネルギー資源などの宝庫である③地球温暖化で北極圏の氷が溶け始めており、将来、北極海航路が開ける。北極海の出入口にあたる北方領土は地政学的要地となる―などだ。

これらを考えると、北方領土問題を早く解決しなければならない。

安倍晋三首相は大型連休中、英国とフランス、イタリア、ドイツ、ロシアなどを歴訪し、伊勢志摩サミットの議長国としての根回しを行う。

クリミア侵攻を受けた、欧米諸国のロシア制裁は続いているが、サミットの主要議題であるテロ対策やシリア問題などの解決には、ロシアの協力が不可欠である。そこで、安倍首相は波長の合うロシアのプーチン大統領の意向をくみ、サミットに臨む。

伊勢志摩サミットは、安倍首相にとって外交手腕の見せ所となる。



安倍首相（左）と、ロシアのプーチン大統領は日ロ関係を前進させられるのか（共同）

伊勢志摩サミットは手腕の見せ所

かわかみ・たかし　1955年、熊本県生まれ。拓殖大学海外事情研究所所長。大阪大学博士（国際公共政策）。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、防衛庁防衛研究所主任研究官、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書に『「無極化」時代の日米同盟』（ミネルヴァ書房）、『「新しい戦争」とは何か』（同）など。